

三田 恵子

鑑賞者の心を
引き込む歌の調べ

繊 細かつ無垢な心の目で見た風景は、全てが美しく輝き、新鮮で瑞々しく映るのだろう。そこからイメージを昇華させ、独自の世界を持った短歌にしており、その透明度の高さに内面が浄化される。細やかな心の表情がさり気なく、しかししつかりと投影された一語一語は、氏のこだわりと思入れが詰まった厳選の言葉といえる。何度味わつても新鮮に響く、魅力溢れる独自の世界。氏の心の声に耳を澄ませ、語らうように鑑賞したい。

透明なところが欲しい夕ぐれは
ガラス窓透くパン屋を覗く

如月のピルの狭間に満月は
マグリットの林檎のごとき膨らみ

みずいろと黄いろのふきんを厨に干す
こころを空へ放たむとして

冬越せる蟬の脱け殻十あまり
卯月みどりの垣根にのこる

鳩十羽テラスの柵にしずかなり
ねぐらに帰る昏れのひととき

複眼のとんぼの目玉欲しき夕べ
振り返り歩む横断歩道

一本のしつぽとなりて飛び帰る
羽音すばやき夕映えの鳥

旅立ちのカバンの中に入れて歩く
護符となしたる赤いハンカチ

ベートーヴェンロマンス第二番聴きおれば
朝より展くわが未知の世界

雪道にイヤリングひとつ落としたり
唇に小さく友引とあり

日高 葉子

今日を生きる
ひたむきな心

幻 想やイメージではなく、実体験をもとに詠っている氏の作品は現実ならではの確かな手応えがあり、同調できるものばかりだ。しつかりとした一本の筋が通った骨のある表現には、日常の思つかいや生きていく実感の確かに存在する。人の数だけ人生があるように、人生の数だけ短歌がある。そう思わせてくれる作品は、今生きる私たちに多くを語り、様々に思いを深める充実した時間を与えてくれている。

次々と旅立ち逝きし友多く
ひと日こもりて紫陽花色褪す

花の名はダリアのみ知ると申されし
講師の言葉の新しくわかりぬ

八十で初めて知りしメニエール病
まだまだ知らぬ事も多きか

目覚めたり今朝の寝具に乱れ多く
痛みし身体の癒ゆるを願ひて

刻みなきイタリアンバセリの種を撒く
一晩水に発芽願ひて

蟻螂は草もののギャングと言はれある
録振り上げて首まはしをり

わが町の派出所の婦警と擦れちがふ
横断歩道に目礼を交はす

弟らを博多の海に肩車に
遊びくれたる父若かりき

泣き止まぬ二歳児胸に抱き上げ
リズムに合はせゆらす保母あり

天然の災害続出その上に
人的災害起すはかなし

植村 可南

初句会今年米寿の師と隣る
職場までの一本道を恵方とす
雪景色現るる白亜の美術館
出迎へる愛犬二匹子供の日
子に半纏着せて爺は祭好き
霞濃し夕日は赤き月に似て

川崎 千恵

公私ともに充実した毎日で、澁刺と人生を楽しむ氏を彷彿させる作品から、明るいエネルギーが溢れ出す。伸び伸びとした新鮮な感性で、俳句を愛する素直な気持ち織り込んでいます。

富士おはす潮騒春の氣をたたす
我がよはひ雛のよはひ今年もよ

臘梅の香のとどきたり友と会ふ
青い空白雲見てる原爆忌

祠ぼつり名水の端紅葉して
露の萎ほっこりまろく母の指

独特の柔らかな雰囲気的印象的で、一語一語に込められた静思の念が鑑賞者の心の中に水のよう

に浸透してくる。「青い空」の句に広がる祈りが染み入り、悲しい歴史への感慨を深める。